8/19(日)
市民川柳あんどん祭り

第六回 高松歴史街道フェスタ

秘密法保護法、安保法、共謀罪、
国民を置き去りにして
改憲へと突き進む国会
また、核とミサイル、南北融和
今、歴史が動くとき
鶴彬なら、どんな川柳を詠むだろうか

ADOPT(アドプト)太鼓

今年も昨年に引き続き、産業文化センターで川柳あんどん祭りが行われます。あんどんの数やライトアップをさらに充実させる予定です。

今年のフェスタの目玉は、国際的に活躍されたチェリスト・伊田直樹さんとバイオリニスト・伊田多喜さんによるコンサートです。伊田直樹さんの分かりやすい解説が曲へといざないます。本場のクラシック音楽をご堪能下さい。

そして、いよいよ演劇「鶴彬～時代を超えて」の日程が決まりました。　乞うご期待。

チェロとバイオリンのひととき

伊田直樹さん㊨と伊田多喜さん

伊田直樹さんプロフィール

チェロ奏者。大阪府出身。景山久雄とマルティン・シュカンパ(プラハ・カレル大教授)に学ぶ。ルーマニア・ブラショフ州立歌劇場主席チェロ奏者。05年帰国。

伊田多喜さんプロフィール

バイオリン奏者。金沢市出身。ゲルノット・ヴィニッシュホーファー（ウィーン音楽大学教授）に学ぶ。ブラショフ州立歌劇場バイオリン奏者。帰国後、夫の直樹氏と金沢市内で伊田弦楽塾を開く。

8月19日(日)　午後2:00～
高松産業文化センター

ADOPTのオープニング太鼓。伊田直樹・伊田多喜によるチェロとバイオリン演奏。第6回 かほく市民川柳の発表・表彰。鶴彬朗読劇。その他。(時間・詳細は未定)

9月2日(日)　午後1:00～
高松産業文化センター

第23回　鶴彬川柳大賞発表・授賞式
第32回　鶴彬忌大会(11時締め切り)

9月14日(金)　午後2:00～4:00

高松歴史公園・南町会館
第20回　鶴彬をたたえる集い　碑前祭

9月21日(金)～9月23日(日)

市民芸術村ドラマ工房（金沢市）
演劇「鶴彬～時代を超えて」

鶴彬通信
はばたき
第32号
2018年５月28日
鶴彬を顕彰する会

もくじ

②～⑫面　勝村誠(立命館大教授)　鶴彬論考
⑬～⑯面　寺内徹乗「明治一五〇年　韓国併合から」
⑰～⑲面　元オウム信者・井上嘉浩死刑囚からの手紙
⑳～㉔面　資料室見学、総会

一九三〇年代における鶴彬の反戦平和運動

立命館大学教授（日本政治史）
立命館大学コリア研究センター長
勝村誠

勝村誠教授
1957年大阪府守口市生まれ。岡山県岡山市育ち。
中央大学法学部政治学科卒。中央大学大学院法学研究科政治学専攻博士課程後期課程満期退学。主に日本近現代政治史や日韓関係史を研究。

1. はじめに
2. 鶴彬と川柳の評価をめぐって
3. 鶴彬の川柳家としての歩み（前史）
4. 除隊後の創作と反戦平和運動
5. むすびにかえて

1. はじめに

一八七四（明治７年）年の「台湾出兵」以来、日本はアジアの各地において連続的に軍事力の行使、侵略戦争、植民地支配の拡大を繰り返してきたが、一九三七年（昭和12年）７月７日に引き起こされた盧溝橋事件をきっかけに日中全面戦争に突入し、その後の日本社会は戦時国民総動員体制へと移行していった。

すでに一九三三年（昭和８年）２月20日にはプロレタリア作家の小林多喜二が築地警察署内で拷問により虐殺されており、文壇には重苦しい空気が漂っていたが、日中全面戦争が開戦すると、もはや反戦的な文学を紡ぎ出すことは、ほぼ不可能な状況になっていた。しかし、若き川柳作家・鶴彬（一九〇九年生～一九三八年没）は、そんな時代にも筆を曲げるどころか、代表作で遺作ともなった「手と足をもいだ丸太にしてかえし」（出征した兵士が戦闘で手足を失うと、［国家は］手足をもぎ取ったまるで丸太のような姿の兵士を故郷に返す[註1]、「胎内の動き知るころ骨がつき」（出征兵士の妻の胎内で胎児が元気よく動くようになった頃、戦死した夫の遺骨が妻の元に届く）[註2]のように正面から戦争を批判する川柳を吐き続けた[註3]。「丸太にしてかえし」の句では、兵士が「かえる」のではなく、国家が兵士を「かえす」と表現しているところが強烈である。

2. 鶴彬と川柳の評価をめぐって

鶴彬の川柳は公然かつ強烈に権力を批判するものであったが故に、鶴彬は「反戦川柳作家」「プロレタリア川柳家」「川柳革新の旗手」と呼ばれ、1960年前後に「再発見」されて以来、４次に亘り注目を集めてきた。

鶴彬を初めて本格的に論評したのは詩人の秋山清である[註4]。これを契機として川柳家や俳人による鶴彬の「再発見」「再評価」が少しずつ進んでいった（１次）。次に鶴彬研究が飛躍的に発展したのは、一九七七年に発行された一叩人［編］『鶴彬全集』たいまつ社（以下、『全集』とする）に帰するところが大きい。一叩人は翌一九七八年に同じくたいまつ社から『反戦川柳人・鶴彬－作品と時代』と『新興川柳選集』を発表した（２次）。

続いて、鶴彬の没60年にあたる一九九八年を前後する時期に鶴彬の伝記的研究が大きく

註１　本論文では、韓国の学術誌に掲載されることに配慮して、引用する川柳の句に、意味が文字通り明瞭な句以外は、できるだけ後ろに（　）を付けて、私なりの大意や解釈を添えてみた。日本語使用者にとっては些か煩瑣であると思われるが、ご理解いただきたい。もちろん、大意や解釈は多様にあり得るから異論や疑問もあるであろうし、私の解釈が適切でない可能性も大いにあることは、あらかじめお断りしておく。なお、川柳作品そのものの直訳は付さないようにする。

註２　木村哲也［編］、『手と足をもいだ丸太にしてかえし 現代仮名遣い版 鶴彬全川柳』、邑書林，2007，133ページ．初出は『川柳人』281ページ，1937年11月15日．

註３　川柳では句を詠むことを「吐く」と言う。尾藤三柳［監修］尾藤一泉［編］、『川柳総合大事典 第三巻 用語編一新古・川柳関連用語・ことばの宝庫』，雄山閣，2007年．同書によれば「時間的律動を拒否する形式上の特質と遺悶（カタストロフィ）という本性を直覚的にとらえたのが『吐く』で、それが『吐』という形で明治新川柳以降の句会などから用語化された」と説明されている。

註４　秋山清，「ある川柳作家の生涯－反戦作家・ツルアキラ」，『思想の科学』，1960年９月．後に秋山，『近代の漂泊―わが詩人たち』，現代思潮社，1970年．に収録。

進展した（3次）[註5]。そして鶴彬生誕一〇〇年にあたる二〇〇九年の前後には、映画『鶴彬 こころの軌跡』の制作・上映運動を柱として学術企画や出版企画も数多く展開され[註6]、引き続き二〇一一年以降には日本における格差社会の進行と呼応する形で、槻沢健を筆頭として鶴彬を「再読」する動きが現れた[註7]（4次）。

しかしながら、鶴彬は、そして川柳は、日本文学史において充分に高く評価されてきたわけではない。ここで簡単に川柳について説明を加えておこう。川柳とは「五・七・五」の17音に託して世相を描き風刺する定型短詩であるが、その起源は江戸時代の古川柳に遡る。古川柳とは柄井川柳の評になる『誹風柳多留』をはじめとする作品群の総称である。日本では現在でも、親しみやすい古典の入門教材として江戸川柳が用いられることがある。

「這へば立て立てば歩めの親心」（愛児が這うようになれば早く立ってくれ、立つようになれば早く歩んでくれと子どもの健やかな成長を願うのが親というものの気持ちである）、「孝行のしたい時分に親はなし」（親孝行をしたいと思う頃には、親はもう亡くなっていて、知らないのは夫だけである）に代表されるような隠微な性的内容を描いた句も多い。古川柳は、そのわかりやすさ、庶民性ゆえに、ことわざや格言としても定着している。

世にいない）、「名月をとってくれろと泣く子かな」（夜空に浮かぶ美しい月を見た子どもが、「あれを取ってちょうだい」と親に泣いてせがむ）など、今でも多くの人びとに親しまれている句は多い。また、「町内で知らぬは亭主ばかりなり」（妻が夫以外の男性と性的関係にあることを近所の住民はみな知っていて、知らないのは夫だけである）に代表されるような隠微な性的内容を描いた句も多い。古川柳は、そのわかりやすさ、庶民性ゆえに、ことわざや格言としても定着している。

一方、明治30年代以降には、新聞の普及にも助けられながら、新時代の文芸精神に目覚めた新川柳が登場し、久良岐社[註8]、柳樽寺[註9]、読売川柳研究会[註10]の三派に寄って発展していく。後述するが、鶴彬はこのうち柳樽寺の流れを汲む。新川柳は自己革新を続け、芸術性を高めていくが、それでも小説、詩、和歌、俳句などに比べると、日本文学史において軽んじられてきた。鶴彬は詩も文芸評論も得意であり、多くの作品を残しているが、それでも川柳人であることにこだわり、川柳の芸術性を高めることと、戦闘性を備えたプロレタリア文芸に鍛え上げることを両立しようとした川柳にこだわったことが、鶴彬が評価を得にくかった理由のひとつであろう。

さて、本論文の課題は、①一九三〇年代を対象時期として、②鶴彬の「反戦平和運動家」としての側面に光を当てることである。そこで、一九三四年以降の鶴彬の創作活動自体を「反戦平和運動」とみなすことにする。そして、鶴彬の川柳や評論に込められたメッセージを手がかりとして、鶴彬の政治的な考え方の特徴を描いてみようと思う。

そのために、鶴彬の創作活動を、①「北国柳檀」に投句していた時期から大阪に出て田中五郎八と森田一二の論争に出会うまで（一九二四年10月～一九二六年夏頃）、②森田一二と出会いプロレタリア川柳家を志してから入隊するまで（～一九三〇年1月）、③除隊後に主に井上剣花坊の「川柳人」でプロレタリア川柳の「創造的発展」に取組み始めてから治安維持法で検挙されるまで（一九三四年1月～一九三七年12月）の3期に分け、①、②を前史とし、③を中心に論じてみる。

3．川柳家としての歩み（前史）

3-1　出生から川柳の作句に至るまで

註5　岡田一杜・山田文子，『川柳人・鬼才「鶴彬」の生涯』，日本機関紙出版センター，1997．深井一郎，『反戦川柳作家 鶴彬』，日本機関紙出版センター，1998．など。

註6　前掲，木村［編］（2007），吉橋通夫，『小説 鶴彬―暁を抱いて』，新日本出版社，2009．尾藤一泉，『鶴彬の川柳と叫び』，新葉館出版，2009．など。

註7　槻沢健，『だから、鶴彬―抵抗する17文字』，春陽堂書店，2011．

註8　久良岐社は1904年（明治37年）6月に阪井久良岐を主幹として創立された結社。機関誌として『五月鯉』（1905年創刊），『獅子頭』（1909年創刊）があり，『電報新聞』を投句先とした。尾藤三柳［編］，『川柳総合事典』，雄山閣出版，1974，97・324ページ。

註9　柳樽寺は1903年（明治36年）7月3日付の新聞『日本』に開設された川柳欄「新題柳樽」をもじって、1905年7月3日に井上剣花坊宅に創立された結社。機関誌として『川柳』（1905創刊），『大正川柳』（1912年創刊），『川柳人』（1927年創刊）がある。前掲，『川柳総合事典』333ページ。

註10　読売川柳研究会は1905年6月7日に窪田而笑子ら『読売新聞』の投句家により設立された。前掲，『川柳総合事典』，323-4ページ。

本題に入る前に、鶴彬の従軍までの歩みを整理しておくことにする。鶴彬は一九〇九年（明治42年）１月１日に石川県河北郡高松町字高松ソ32番地（現在の石川県かほく市高松）に、竹細工職人の父・喜多松太郎と母・寿ずの二男として生まれた。本名は喜多一二（かつじ）で、実際の出生は一九〇八年の年末であったと言われている。一九一五年に当時子供がいなかった伯父・喜多喜太郎の養子となり、翌年には父・松太郎が亡くなり、母・寿々が同郷の瀧井芳太郎と再婚したため、肉親との温もりには恵まれない幼少年時代であったと思われる。鶴彬は勉強が好きで、尋常小学校での成績は男子67人中１番と優等であり、師範学校に進学して教員になることを望んだが、養父は家業を継ぐことを期待してその夢を許さず、鶴彬は高等小学校に進学した。作家の田辺聖子は、そんな家庭環境が鶴彬を文学好きにさせたのかもしれないと推察している。少し長くなるが引用しておく。

> 少年は向学心を阻まれて鬱屈しながら、手当たり次第に本や新聞を読んでいた（大した教育は受けなかった鶴だが、生来の慧敏な資質と努力、好学精神で、独学の教養を積んだらしい）。誰から享けたのか、文学趣味があった。父は死に、母は遠く離れて別の家庭の人となってしまった。…そんな環境が感受性強い少年を文学好きにしたのかもしれない。[註11]

喜多一二は一九二三年（大正12年）に高等小学校を卒業し、伯父・喜太郎が経営する機屋で働き始める。その頃、貸本屋を営む町内のインテリ・岡田澄水と出会い文学的影響を受け、愛読していた『北国新聞』の「北国柳檀」欄で福村無一路の作品に触発される。そして、同年10月25日には早くも「北国柳檀」に「高松　喜多一二」の柳名で３句が選句されている[註12]。そのうちの１句が「燐寸の棒の燃焼にも似た生命」である。満15歳の少年が吐いたとはとても思えぬ哀愁漂う句である。ここからの喜多一二少年の創作初期を本稿では第一期とする。この句については棚沢健の解釈が象徴的であるので引用しておこう。

> この記念すべきデビュー句は、皮肉なことに、官憲の拷問により赤痢に罹り殺された鶴彬自身の、わずか29年８ヶ月という、「燐寸の棒の燃焼にも似た」短く壮絶な一生を暗示する予言的な作品となった。理不尽に生命を奪われたことを考えれば、「燃焼」をまっとうできたわけではなかった、と言った方が正しいだろう。まだまだ燃え盛る「燃焼」の中途で、理不尽にもその炎を官憲によって吹き消されたのだ。[註13]
>
> もちろん、15歳の喜多一二少年が自らの早すぎる最期を予見していようはずはないから、上記の解釈は事後的になされた過剰な意味づけだと思われるかもしれない。しかし、この句が書かれたのが関東大震災の直後であったこと、喜多一二が生まれた一九〇九年からこの歳までの15年間は日本が富国強兵と植民地帝国化に明け暮れた時期であり、民衆の生命が軽んじられた時代であったことを考え合わせるならば、喜多一二にとって死は身近にあるものであり、自らも無念のまま死にゆく無名の民の側にあることを自覚していたのかもしれない。この句の発表直後の句に「滅びゆく生命へ滅ぶ可きが泣き」[註14]（死が迫っている命に、いずれ死ぬ運命にある者たち［死んでもらいたい者たち］が泣いている）という句がある。鶴彬は川柳を吐き始めた頃から「滅びゆく」すべての者たちを愛おしみ、「滅びゆく」生命の側に立って生きようとしていた。それが作風のトーンとして一貫して流れている。

3-2　川柳人としてのデビュー

喜多一二はその後も「北国柳檀」に精力的に投句し、一九二五年（大正14年）５月５日の柳檀デビューに至るまで[註15]、１年半に34回198句が掲載されている[註16]。この時期に、機屋の主人の養子であった一二少年が機屋で働く女工のことを吐いていることに注目したい。少年期の鶴彬は養父の機屋で働く女工たちから「工場長」と呼ばれて可愛がられていたようであるが、そんな女工たちが厳しい労

註11　田辺聖子.『道頓堀の雨に別れて以来なり―川柳作家・岸本水府とその時代（中）』, 中公文庫, 2000, 411ページ.
註12　前掲, 木村［編］, 8ページ.
註13　棚沢健.『だから、鶴彬－抵抗する17文字』, 春陽堂, 2011年, 23ページ.
註14　前掲, 木村［編］, 9ページ. 初出は「北国柳檀」1923年11月4日.
註15　「北国柳檀」：1925年4月28日（7句が選句されている）までを指す。
註16　前掲, 木村［編］, 8-24ページを参照してカウントした。

働環境の中で健康を害して使い捨てられていく姿を目の当たりにして、虐げられる弱者の声をすくい取ろうとしていたことが伺われる。

籠の鳥歌って女工帰るなり　「北国柳檀」
一九二四年11月30日付
（当時流行した歌謡曲「籠の鳥」を歌いながら女工が仕事を終えて帰る。
「籠の鳥」は愛する男性に会いたいときに会えない妾の悲しさを歌った曲である）

縮まって女工未明の街を行く　「北国柳檀」
一九二四年12月18日付
（体を縮こまらせて女工が深夜の街を歩いて行く。深夜勤務の厳しさを詠んだ句か）

女工達　声を合せて唄い出す　「北国柳檀」
一九二四年12月18日付
（女工達が誰からともなく唄い始め、いつか声を合わせて唄うようになる）

棚沢健は「富国強兵の影で使い捨てにされ、つぎつぎと結核で死んでいく『女工』を見つめることから、鶴彬の川柳ははじまっている」[註17]と評価しているが、正鵠を射ているだろう。また浄土真宗の信仰に厚い人々が多い石川県で育った鶴彬が「仏像を爪んで見ると軽かった」[註18]（大意は省略）のように、仏教信仰を皮肉った句を吐いている点も興味深い。

註17　棚沢健，「だから、鶴彬－抵抗する17文字』，春陽堂書店，2011年，90ページ．
註18　前掲，木村［編］，24ページ．初出は「北国柳檀」1925年4月28日．

一九二五年の春に鶴彬は、ついに憧れの福村無一路に会うのだが、それが人生の転機となる。福村は当時登り坂の勢いであった新興川柳の柳誌の数々、小樽の田中五呂八の「氷原」、名古屋の古屋夢村の「影像」、名古屋の森田一二の「新生」などを紹介し、鶴彬はそれを福村から借りて猛勉強し、投句した。そして早くも、「影像」の一九二五年4月号に「石川　喜多一児」の柳名で8句が掲載されている。その内の2句目が「暴風と海との恋を見ましたか」（大意は省略）である。鶴彬が育った高松町は日本海の荒々しい海に面した小さな町であるが、海が暴風と出会うことを恋に見立て、海が暴風を待ち焦がれ、暴風との出会いを悦んでいると捉える躍動的な句である。この句で鶴彬は川柳界へのデビューを遂げた。

3-3 プロレタリア川柳へ

喜多一二は田中五呂八が主宰する「氷原」にも投句し、一九二五年（大正14年）10月20日号発行の16号に「喜多一二（石川）」の柳名で「薄桃色の花の呼吸の乱れたり」（大意は省略）など5句が選句されている。ここまで早熟の川柳人として順調に歩み始めた鶴彬であった。鶴彬は田中五呂八に才能を認められ熱心な指導を受ける。鶴彬は田中五呂八の訃報に接した折りにその頃の田中五呂八との関係について次のように回顧している。

註19　鶴彬「田中五郎八と僕」，一叩人［編］，『鶴彬全集』，たいまつ社，1977，365ページ．以下、『全集』と略記する。『全集』からの引用は一部の表記を修正することがある。

当時の僕はまだ一七、八歳の文学少年であり、そして丁度この年頃だれでも一度はかかる人生や宇宙の問題に対する哲学的懐疑にとりつかれている最中であった。そこへいきなり田中五呂八の神秘主義的な哲学的評論や作品があらわれてきたのである。僕はわけもなくまいってしまったのである。それは「氷原」十五号あたりからだとおぼえているが、とにかくここに田中五呂八イズムの信奉者としての僕の川柳生活がはじまっている。

さてこのようにして「氷原」に登場した僕は、ひとつにはまだ二十歳にもならない少年であるということがその原因の一つでもあったろうが間もなくして田中五呂八の注目をうけるようになった。いやそれは注目というよりも指導と言った方が適当かも知れないほどことごとに僕の作品や文章をとりあげてきまりの恥しいほどほめそやしたり、また直接に一ヶ月に三四回も手紙やハガキをくれて激励したり注意したりする熱誠的な愛情にあふれたものであった。[註19]

喜多一二が創作を続け研鑽を重ねることができたのは田中五呂八のおかげであった。「氷原」には一九二八年11月10日発行の35号まで喜多一二の句が掲載されている。ところで、一九二六年（大正15年）の初めに、鶴彬に大きな転機が訪れた。養父の機屋

が倒産し、喜多一二は従兄の喜多市郎を頼って大阪に出たが、働き口が見つからず、仕事探しに疲れ果てた頃、「友人の下宿で…汚い蒲団にくるまりながら」「氷原」誌上で森田一二が田中五呂八に挑んだ論争を読みふけった。

神秘か科学か、現実か超現実か、こう考えている僕の胃袋は、まさに今日の現実を飢えていたのである。パンを得なくして何の思索があろう。仕事につかなくて何の文学があろう。僕はむしろ頭脳で考えるよりも胃袋で直感したのである。[註20]

論争は一九二六年5月から8月にかけてのことである。喜多一二は田中五呂八と決別して森田一二を支持することを決心した。

間もなく僕はある汚い工場に入った。田舎の小ブルジョアの家庭に風あたらずで育った僕は、はじめて味わった都会の生活の嵐に吹きまわされ、工場の生活が骨身にしみこませる資本主義の矛盾に痛めつけられ、もはやこの世に超現実的なものは何ほども実在しないことを体感したのである。そして僕はしばらくして東京に出ると同時に「川柳人」に「僕らは何をなすべきか」という一文を書き、森田の現実主義を支持する態度をあきらかにし、かつての指導者田中五呂八へ反逆の旗を掲げたのである。[註21]

本稿では、こうして神秘主義川柳から離れて労働者の現実を切り取る姿勢を明確にした時期を喜多一二の「第二期の始まり」と捉えてみる。先の田中＝森田論争からはかなりの日数が経っているが、森田一二は一九二七年12月1日発行の「川柳人」82号に発表した評論「僕らは何をなすべきか」（おそらくレーニンの『何をなすべきか』をなぞった題名なのであろう）をこんな宣言で結んでいる。

来るべき川柳は古川柳の中に武家政治へ反逆して生まれ出たものがあった如く（伏字14文字：引用者）換言すれば「〇〇〇〇」の短詩として文壇よりも社会へと進出せねばなるまい。今日民衆の飢えているものは実は川柳の如き街頭の芸術であり、批判の芸術であるから。[註22]

田中＝森田論争が始まった一九二六年5月からこの頃までの喜多一二の句を見ると資本主義や宗教を批判する社会主義的な句が徐々に増えている。一部を紹介しておく。

資本主義の工場ニヒリストの煙突
「氷原」一九二六年5月5日
（資本主義の象徴である工場にはニヒリストのように煙突が立っている）

妻子飢ゆればストライキに不入
「影像」一九二六年9月5日
（家族が生活できなくなると労働者はストライキに突入できない）

監獄の壁にどれい史書きあまり
「影像」一九二七年5月5日
（監獄の壁には収監された人々が書いた落書きが余りあり、奴隷史の記録のようだ）

あな尊うと聖書を売れば明日のパン
「影像」一九二七年5月5日
（とても尊いことに、聖書を売れば明日食べるパンが買える）

このように喜多一二は社会的弱者が虐げられる現実を直視し、その現実を川柳によって吐き出すプロレタリア川柳家となった。また、この時期に喜多一二には重要な出会いがあった。一九二七年の5月春以降、日時は特定できないが、文通を通じて親しくなった森田一二と出会い、森田に伴われ上京する。このときに森田によって柳樽寺の井上剣花坊、井上信子夫妻に引き合わされたのである[註23]。鶴彬と井上剣花坊の関係については、後述する。

3-4 高松プロレタリア川柳研究会

翌一九二八年の2月に郷里の高松町に戻った喜多一二は、「僕らは何をなすべきか」の宣言通り行動に移す。3月には友人たちと高松プロレタリア川柳研究会を結成し、続いてナップ高松支部を組織してプロレタリア文芸運動の実践に踏み出す。川柳の作風も明快で戦闘的なものに変化していく。

鶴彬を井上剣花坊宅に連れてきたのは1928年以降と書かれている。

註20　同前，367ページ．
註21　同前，367ページ．
註22　同上，80ページ．
註23　前掲，田辺，425ページ．ただし、坂本幸四郎，『井上剣花坊・鶴彬 川柳革新の旗手たち』，リブロポート，1990年，234ページ．には、森田が

搾られる生活白痴の子が殖る
（資本家に搾取される労働者の生活の下では子どもに教育を付けされる余裕などなく、勉強が苦手な子どもが増えていく）
灼熱の群衆、鉄の門を破り
（闘争に燃え上がった群衆が、閉ざされた鉄の門を破ってなだれ込む）
鰯の如く民衆眼を貫かれ
（まるで目を貫かれた鰯の丸干しのように、民衆は現実から目を背けさせられている）
［以上、「高松川柳研究会」一九二八年3月23日より］

仏像の封印切れば犬の骨
（仏像の下の封印を切ってみたら中には犬の骨が入っていた）
遂にストライキ踏みにじる兵隊である
（最後にはストライキを鎮圧するのは兵隊である）
ロボットを増やし全部を馘首する
（工場内にロボットをたくさん導入して労働者をみな解雇する）
奴隷ども集めて兵器こさえさせ
（労働者＝賃金奴隷たちを集めて兵器を作らせて［それで戦争に向かう］）
重税に追われ漁村に魚尽きる
（重税の負担に追いつめられているうちに漁村には魚がいなくなってしまう）
［以上、「高松プロレタリア川柳研究会抄」一九二八年4月8日より］

しかし、喜多一二の故郷における実践は長くは続かなかった。同年4月30日の朝7時、喜多一二ら川柳研究会の4人は石川県高等警察に検束され家宅捜索を受ける。こうして高松町に根を張って試みたプロレタリア文芸運動は短い歴史に幕を下ろした。

3-5 反軍活動から除隊まで

一九二八年の秋に釈放された喜多一二は特高警察の監視を逃れるため剣花坊・井上信子夫妻を頼って上京して暫く寄宿したのち、10月頃に実母・瀧井寿ずの家で暮らすようになる。11月から筆名を鶴彬に変え井上剣花坊が主宰する「川柳人」に川柳や評論を発表するようになる。この頃の句には「血を流す歴史のあした晴れ渡る」、「海こえて世界の仲間手をつなぎ」、「大衆の手に翻る一頁」、「獄壁を叩きつづけて遂に破り」、「群衆のなだれ屍を超えて燃ゆ」[註24]（以上は大意省略）など、プロレタリアの団結と勝利を吐いた句が目立つ。治安維持法違反で実践の道を断たれた第2期の喜多一二は、釈放後にいっそう戦闘的な作風に転換した。井上剣花坊は「川柳王道論」を主唱する保守的な川柳家であったが、鶴彬の人柄と才能を愛し、このような階級的作品に誌面を提供することを恐れなかった。

一九三〇年1月10日、21歳になったばかりの喜多一二は金沢の第九師団歩兵七連隊第九中隊に入隊したが、7月には「金沢第七連隊赤化事件」が起こった。喜多一二が隊内に密かに持ち込んだ日本共産青年同盟機関誌『無産青年』が鶴彬ら二人の私物入れから発見されたという事件であった。一九三一年6月13日に開かれた軍法会議で鶴彬は治安維持法違反で懲役2年の判決を受け、金沢から大阪に移されて大阪衛戍監獄で1年8ヶ月に亘り刑に服した[註25]。一九三三年2月に釈放されて金沢の原隊に戻ったあと、鶴彬は12月に除隊し、故郷の高松町に戻り、かつての同志であり指物大工であった沖野栄吉宅に身を寄せた。

4. 除隊後の創作と反戦平和運動

鶴彬は除隊後すぐさま創作を再開した。除隊後はじめて発表した作品を紹介しておく。

自由旗の下に
弾丸の来ぬところで
□□の
詩が出来た（監獄のなかで戦争を題材にした詩を作詩したという意味か？）
×
ヘーゲルの弁証法を
逆さにして

註24　前掲，木村［編］，71-72ページ．初出は「川柳人」，1931年1928年11月1日．
註25　1932年4月29日に上海の虹口公園で開催された天長節祝賀式典会場で尹奉吉は爆弾を投げて陸軍大将・白川義則らを殺傷する義挙を行ったが、尹奉吉は5月25日に上海派遣軍軍法会議で死刑判決を受け、11月18日から12月18日まで大阪衛戍監獄に移監された後、12月19日に金沢に移されて銃殺刑に処された。奇しくも鶴彬と尹奉吉は1ヶ月間、同じ大阪衛戍監獄に収監されていたのである。2008年9月に大阪のあかつき川柳会によって大阪衛戍監獄跡地（大阪城公園内）に鶴彬顕彰句碑が建立されている。

獄窓の春！　秋！
×
目かくしされて
書かされてしまう
□□書
×
地下にくぐって
春へ、春への
導火線とならう
×
飲食の胃袋が
手をつなげとけしかける[註26]

この句は、①５句の連作にタイトルを付け、②川柳を三行で吐くという新しい手法に挑戦し、③２つ目の句が示すように「五・七・五」の定型音律を大きく逸脱して点が注目される。また、３つ目の句では、伏せ字で隠しているとはいえ、公然とした警察批判であることは明瞭である。鶴彬は大阪衛戍監獄で厳しい拷問を受けたとも言われているが、それによって姿勢を曲げることなく、川柳の更なる革新に挑んだ。

しかも、鶴彬にとってはそのことが闘争・運動であった。本稿ではこの除隊後の時期を第三期と捉え、この期の鶴彬の生き方を「反戦平和運動」として整理する。川柳を吐くことと、闘争としての運動とは別のものであると考える向きもあるが、鶴彬はそれを統一的に捉えていた。鶴彬にとっては川柳と詩の創作や評論を紡ぎだすこと自体が運動であった。次に紹介する鶴彬の宣言は一九三七年に書かれたものであるが、「わらじを履きかへて、前進した方がいい」、つまり、闘争的な川柳を書くぐらいなら実際に運動に参加すればいいじゃないかと川柳評論家の品川陣居[註27]に冷ややかに揶揄されたとき、敢然とこう宣言している。

僕自身といえども僕の青春期を困難な政治闘争に賭け、□□生活の苦悩をまで背負わされてきているのだから、政治につく方が文学につくよりも直接的効果的であることはわかっている。わかっているが、現在の困難な状勢はそうやすやすとわれわれが政治につくことをゆるさないのだ。問題はそればかりではない。一人の人間がもっている環境、肉体、意思、才能等が、政治にむくか文学にむくかをも決定しているのだ。だから僕ははじめ文学から出発し、政治に入り、その政治にやぶれてまた文学へかえってきたのだ。文学といえども立派な文化的実践であることを知っているが故に、時代にやぶれ、食うことすらむずかしいからだを鞭うって闘っているのだ。[註28]

高松町で地域に根を張って政治闘争としてのプロレタリア文芸運動を展開しようとし、入隊後は軍隊内においても反軍活動を試みた鶴彬は、釈放後には特高警察にマークされ、もはや現実の政治闘争にかかわる術を失っていた。しかしながら、当時の川柳会において鶴彬には作品を発表する機会を失っていなかった。それゆえ、鶴彬は実践としての創作を志し、弾圧に抗していっそう激烈な政府批判、軍部批判の川柳を発表するに至る。

また、創作態度の面では、一九三〇年１月の入隊から一九三四年に創作を再開するまで、４年間に亘り川柳家としての人生の中断を余儀なくされていた鶴彬は、その中断期間に、これまでの自分のプロレタリア川柳の限界を内省し、新しい川柳の方向性を構想していた。鶴彬の評論「定型律形式及び図式主義への闘争」[註29]にそのことが明瞭に綴られている。鶴彬はプロレタリア川柳の発展の過程では五七五音の定型律形式が「プロレタリア川柳に最も適した唯一の形式だと思い込んでしまった」[註30]がそれは誤謬であったとして、以下のように厳しく自己批判している。

山村浩が、五七五調は、日本語のもつ一定不変のリズムだと言ったのは正しくない。ま

註26　前掲，木村［編］，86ページ．前掲，『全集』，174ページ．初出は「川柳人」255，1934年1月1日．『全集』編者の一叩人は5句目が2行書きになっているのは「紙幅（編集）の都合」と推測している。木村哲也は3句目の伏せ字を「転向」と推定している。鶴彬の三行書き川柳の試みは1935年1月まで続くが、その後は見られない。

註27　品川陣居は1895年に東京・日本橋に生まれる。句作よりも川柳評論で有名で、東洋経済新報の出版局員として朝鮮、中国駐在員を務めた。1959年死亡。尾藤三柳［監修］尾藤一泉［編］，『川柳総合大事典 第一巻 人物編 一近世・近代・現代川柳家・関連人物』，雄山閣，2007，127ページ．

註28　前掲，『全集』，401ページ．初出は鶴彬「川柳は一つの武器である」『火華』29，1937年8月1日．

註29　『川柳人』261，1934年7月1日．同263，同年9月1日．に分割掲載。

註30　前掲，『全集』，197ページ

た、定型律形式の、印象性、歌謡性をもって大衆的だとする僕の意見もあまりである[註31]。われわれは定型律的なメーデー歌より、自由律的なプロレタリア抒情詩が、より労農大衆の意識や感情を、深刻に、朗詠的に描いた実例を知っている。[註32]

そして、「血を喀いてシキをあがればくびになり」（鉱山の労働現場で血を吐いたため坑道から地上に出たら解雇された）など、鶴彬自身の作品を14点も挙げて、以下のように酷評している。

これらの作品の過半は、公式的な政治的怒号や、イデオロギイに貧弱な肉づけをした、観念的な報告にすぎないであろう。ときにはプロレタリアートの眼ではなく、小ブルインテリのヒロイズムの眼がはたらいている。[註33]

4年の中断を経て創作を再開した鶴彬は、五七五調のスローガン的な川柳を乗り越えて自由律形式を発展させることを試みたのである。

プロレタリア川柳は、その新しいレアリズムのために、古川柳や通俗川柳のもつ、事物を確定的に描くという洗練された技術を学ぶと共に、複雑な内容を簡易な表象化や、捨象的方法によって表現する神秘川柳の象徴的技術をも消化せねばならぬ。この過去の川柳が持つ技術の吾々の備えの正しい消化と止揚とによって、吾々の川柳は、一切の過去の川柳の最高に立つことが出来るであろう。それは作者の個性や才能や技術にもっともふさわしい内容や形式への創造的探究および創造的発展によって貫かねばならぬ。自由律形式の発展はこの道を通じて創造の翼を羽ばたきさせよ。[註34]

鶴彬は、①「古川柳」の「洗練された技術」に学び、②「神秘主義川柳」の象徴的技術も消化し、③それらを消化・止揚して「作者の個性や才能や技術」に応じた「内容や形式への創造的探究および創造的発展」を図らねばならないと宣言した。かつてはプロレタリア川柳とは対立的にとらえていた「神秘主義川柳」について、ここでは排除するべきものと捉えるのではなく、消化するものと捉えている点は興味深い。鶴彬は、一九三五年になると三行書きは止めて、①タイトルを付して、②自由律形式の句を交えて、③複数の句で構成する短詩のような川柳作品の創作に挑戦した。その最初の作品を紹介しておこう。

南葛の鼓動
やっと食うだけの労働街に魔窟の灯よ
ひるのサイレンはあぶれた腹の庭に鳴る
夜業の窓にしゃくな銀座の空明り
埋め立てのむごさをひしゃげたトロッコの
廃線

火をはらむ飢えと不平の歯車よ[註35]

もはやこれが川柳なのかという疑問の余地もあるが、まるでルポルタージュ文学のように、南葛に足を運んでそこに暮らす人びとをインタビューし、その現場を映像で切り取ったかのような作品である。優れたドキュメンタリー映像を見るかのように現場の有様が浮かび上がる。飢えたる労働者の実態を克明に告発するかのような筆致は、川柳作家としての作句がまさに鶴彬にとって闘争であったことを示す。この作品からはもはや、一句だけを抜き出すことはできず、5句がセットで詩的な作品を構成している。

「われわれは、何よりもさきに、具体的現実から出発せねばならぬ」[註36]と唱道する鶴彬にとっては一九三四年（昭和9年）の東北大飢饉は正面から見据えねばならない惨事であった。

凶作地帯ー渡辺順三におくるー
枯れた乳房から飢饉を吸うている
半作の稲枯らせて地主のラジオ体操
凶作を救えぬ仏を売り残している
（祈っても凶作を救えない仏壇は売ろうにも売れないので残している）
食う口を減らすに飼猫から食べはじめ
一粒も獲れぬに年貢の五割引[註37]
小作の娘
村中の娘売られて女学校に行ける地主のお

註31　「あまりである」は「余りである」＝「余りにも単純／機械的である」ぐらいの意味であろう。
註32　前掲，『全集』，198ページ．
註33　前掲，『全集』，208ページ．
註34　前掲，『全集』，210-211ページ．
註35　前掲，木村［編］，86ページ．初出は『川柳人』267，1935年1月1日．
註36　前掲，『全集』，209ページ．
註37　前掲，木村［編］，105-6ページ．初出は『川柳人』268，1935年2月1日．

嬢さん
みな肺で死ぬ女工の募集札
恋すればクビになる掟で搾りつくされる若さ
お嫁にゆく晴衣こさえるのに胸くさらせている
ふるさとへ血へど吐きに変える晴衣となりました
あかぎれの血を織り込んだ人絹の捨て売り
貞操を為替に組んでふるさとへ
吸いにゆく一姉を殺した綿くずを
富士がそびゆる空を低賃銀のすすけむり[註38]

こうして鶴彬の川柳は一行の五七五＝17音では収まらない告発文学の性格も兼ね備えた境地へと発展していったのである。そして、鶴彬の告発の眼差しは朝鮮人差別への内在的批判に突き進む。

半島の生まれ
半島の生まれでつぶし値の生き埋めとなる
内地人に負けてはならぬ汗で半定歩のトロ押す
半定歩だけ働けばなまけるなとどやされるヨボと辱しめられて怒りこみ上げる朝鮮語となる
鉄板背負う若い人間起重機で曲る背骨
母国掠め盗った国の歴史を復習する大声
行きどころのない冬を追っぱらわれる鮮人小屋の群れ[註39]

「つぶし値」は地金の安値で買われた金属類のこと、「半定歩」は「半島人」の労働賃金が「内地人」の半分であったこと、「トロ」とはトロッコのこと、「ヨボ」は当時の日本人が朝鮮人を指して使った軽蔑的呼称である。「生き埋め」とあるが、当時は実際に朝鮮人が生き埋め事故の犠牲になることも少なくなかった[註40]。自由労働者として朝鮮人労働者とともに現場で働いたことがある鶴彬ならではのリアリティに満ち溢れる作品である。

労働現場の描写もさることながら、５句目ではこの年（一九三六年）から本格化した朝鮮人に対する皇民化教育において神社参拝、宮城遙拝、教育勅語の暗誦を強いることの残酷さを撃っている。「皇国臣民の誓詞」が発表・強制されるのは一九三七年であるが、それに先んじていち早く吐いている点に鶴彬の先見性があると言えよう。

川村湊は、他の川柳作家が朝鮮人を描くときの朝鮮人観（冷ややかで嘲笑的な態度、あるいは表面的な理解や配慮）と比較して、以下のように評価している。

鶴彬の川柳作品の視線が、朝鮮人労働者にとって、稀に見るほどの同情的、共感的、いわば同志的な親愛感に満ちたものであるかが、再認識されるのである。社会学的な認識と、歴史学的な視線によって見なければ、朝鮮人労働者の真の姿を見ることはできない。鶴彬の例が、まさしく例外的であったのは、「革新川柳」でさえ、人間や世間の表面だけを機知的にとらえ、それを面白おかしく伝えるという遊戯性から、まだ何歩も出ていなかったからである。社会性、批判性、庶民性、現実性、風刺性によって、川柳が俳句や短歌などの他の短詩型文学から隔てられているという自覚が持てるようになったのは、まさに鶴彬のプロレタリア川柳の出発からといっても過言ではないのである。[註41]

鶴彬が権力や戦争に向けて突きつける刃はますます切れ味を鋭くしていった。冒頭にも紹介したとおり、一九三七年夏の日中戦争の全面化により、赤紙（召集令状）一枚で多くの若者が戦線に駆り出され、報道は連戦連勝を告げるなか、鶴彬は真っ正面から反戦川柳を発表した。

高粱の実りへ戦車と靴の鋲
屍のいないニュース映画で勇ましい
出征の門標があってがらんどうの小店
万歳とあげて行った手を大陸において来た
手と足をもいだ丸太にしてかえし

註38　前掲，木村［編］，116-7ページ．初出は『詩人』，1936年4月号．
註39　前掲，木村［編］，123ページ．初出は『火華』，1936年12月号．
註40　1929年11月に金沢市の犀川上流で上下水道の鉄管敷設工事中に７名が生き埋めになり3名が死亡した事故があり、このとき日本人が朝鮮人より優先的に救出されたため、金沢で朝鮮人による争議が起こっている。寺内徹乗はこの事件を紹介し、「鶴彬はこの事件を詠んでいるのかもしれません」としている。『鶴彬通信はばたき』31号，2018年1月21日，2ページ．
註41　川村湊，「鶴彬とプロレタリア川柳」，『国文学』，2007年8月，124-5ページ．

胎内の動き知るころ骨がつき[註42]

2句目に「ニュース映画」とあるが、この6句全体がニュース映画を思わせる情景描写になっている。勇ましい戦車と歩兵の進軍シーンを見て鶴彬はその裏で、映画には描かれない踏みつけられたトウモロコシ畑や、累々と横たわる屍に思いを馳せる。働き手を失った焦点、戦傷者、そして戦死者、残された家族、生まれてくるであろう父なき乳飲み子の泣き声…戦争によって痛み付けられるものどもの生々しい姿を、鶴彬はくっきりと描き出す。冒頭にも提示した「丸太にしてかえし」のくだりについて楜沢健はこう評す。

「してかえし」の5文字に込められた「人民の怨嗟」。行き場のない、どこに吐き出し、ぶつければよいのかわからない「腹の底からの」怒り、悲しみ、恨み、自嘲、冷笑がこの句にはあふれている。笑いながら怒り、怒りながら泣き、泣きながら笑い、笑いながら恨むしかない「怨嗟」の渦が、わずか一七文字の定型律のなかにかろうじておさめられ、封印されている。定型と定型にならないもの、一七字と一七字にならないものが、激しくぶつかりあい、いまにもその均衡が破れそうな気配を漂わせている句といってよい。[註43]

このように民族差別や戦時動員を根本的に批判した鶴彬。この若き川柳家をこの世から葬り去ったのは、身内である川柳界からの保身のための攻撃であった。大阪の柳誌『三味線草』が鶴彬の「丸太」の句をあげつらい「いかに非国家的作品であるかに慄然たらざるを得ない」[註44]と誌上批判をしているが、その前号ではすでに「反省せざる場合は、吾人は別の手段によって善処したいと思ふ」[註45]と脅迫的予告もされていた。同誌の編集者である鶏牛子が鶴彬と『川柳人』主宰社の井上信子のことを特高に密告したものと推測される。鶴は留置所で赤痢に感染し（感染させられ）、手錠をかけられたまま病院で命を落とす。日本軍国主義は聖戦の妨害者の存在を許さなかったし、日本民衆は聖戦を撃つ者を失った。

5．むすびにかえて

前述の通り、鶴彬は川柳の創造的発展を試み、プロレタリア川柳家、反戦川柳家としての新境地を切り拓いてきた人物であると評価できる。その新境地こそが、戦時においては川柳からはみ出すものとして川柳界から危険視され、川柳界によって刺されたわけである。

すでに述べたように鶴彬自身は五七調を超える川柳を構想していた。一方で、近年精力的に鶴彬を再評価している楜沢健は、鶴彬の「息づまる煙りの下の結核デー」（粉塵が舞い煙に息づまるような労働環境の工場に「結核デー」のスローガンが書かれている）という川柳などを例に挙げて、「鶴彬の川柳は、街頭を占拠する韻律を踏まえた五七調のスローガンや標語や広告コピーの恐ろしさ、その嘘と詐欺とやらせのレトリックを換骨奪胎させるところに成立した表現であり、方法であった」[註46]と評価している。確かに、鶴彬が一時期は政治的スローガンのパロディとして作品を作っていたことは間違いないが、一九三四年の段階では鶴彬自身がそのような自分の作品に対して厳しく自己批判していたことは確認しておくべきであろう。4年の中断を経て創作を再開した鶴彬は、五七調のスローガン的な川柳を乗り越えて自由律形式を発展させることを試みたのである。

五七調こそが川柳の「核心」なのか、五七調を乗り越えるところに川柳の「革新」があるのか、語呂合わせになってしまったが、そんな解けない問いを吐き出して本稿を閉じることにする。

①キーワード
鶴彬、川柳、治安維持法、日中全面戦争、プロレタリア文芸運動、反軍活動、大阪衛戍監獄、飢饉、朝鮮人労働者

②参考文献（発行年順）
秋山清，「ある川柳作家の生涯－反戦作家・ツルアキラ」，『思想の科学』，1960年9月．
秋山清，『近代の漂泊―わが詩人たち』，現代

註42　前掲，木村［編］，133ページ。初出は『川柳人』281，1937年11月15日．
註43　前掲，楜沢『だから，鶴彬－抵抗する17文字』，86-87ページ．
註44　前掲，『全集』444ページ．初出は『三味線草』，1937年11月15日．
註45　前掲，『全集』444ページ．初出は『三味線草』，1937年10月15日．
註46　楜沢健，「スローガンとプロレタリア川柳－鶴彬と川柳の一九三〇年代」，『社会文学』37，2013，49ページ

思潮社,1970年.
尾藤三柳［編］,『川柳総合事典』,雄山閣出版,1974.
一叩人［編］,『鶴彬全集』,たいまつ社,1977.
坂本幸四郎,『井上剣花坊・鶴彬―川柳革新の旗手たち』,リブロポート,1990年.
岡田一杜・山田文子,『川柳人・鬼才「鶴彬」の生涯』,日本機関紙出版センター,1997.
深井一郎,『反戦川柳作家 鶴彬』,日本機関紙出版センター,1998.
田辺聖子,『道頓堀の雨に別れて以来なり―川柳作家・岸本水府とその時代(中)』,中公文庫,2000.
木村哲也［編］,『手と足をもいだ丸太にしてかえし 現代仮名遣い版 鶴彬全川柳』,邑書林,2007.
尾藤三柳［監修］尾藤一泉［編］,『川柳総合大事典 第一巻 人物編一近世・近代・現代川柳家・関連人物』,雄山閣,2007.
尾藤三柳［監修］尾藤一泉［編］,『川柳総合大事典 第三巻 用語編一新古・川柳関連用語・ことばの宝庫』,雄山閣,2007年.
川村湊,「鶴彬とプロレタリア川柳」,『国文学』,2007年８月号.
吉橋通夫,『小説 鶴彬―暁を抱いて』,新日本出版社,2009.
尾藤一泉,『鶴彬の川柳と叫び』,新葉館出版,2009.
棚沢健,『だから、鶴彬―抵抗する17文字』,春陽堂書店,2011.
棚沢健,「スローガンとプロレタリア川柳―鶴彬と川柳の一九三〇年代」,『社会文学』37,2013.

③抄録

プロレタリア川柳家、反戦川柳家として知られる鶴彬は、一九三〇年７月、軍隊内で反軍活動をした嫌疑で捕らえられ、一九三一年５月に軍法会議で治安維持法違反の判決を受け、一九三三年２月まで大阪衛戍監獄に投獄された。釈放後の鶴彬は弾圧にひるむことなく、当時の政府や軍部を批判するいっそう激烈な川柳を吐き続けたが、本論文は、その時期の鶴彬の創作活動を反戦平和運動と位置づけ、その作品を通じて鶴彬の思想を探ってみたものである。

④英文題目　TSURU Akira's Antiwar Peace Movement in 1930, s

⑤英文抄録

TSURU Akira is known as a proletarian senryu(川柳) writer, or an antiwar senryu writer. He was caught by the suspicion which carried on rebel army activity in July 1930, and received in judgment by the suspicion which violated Peace Preservation Law . So , he was jailed Osaka eiju jail until February 1933. TSURU Akira after release kept making the more critical masterpieces of senryu which attacked Japanese government and the military in those days without flinching from pressure. In this paper I placed TSURU Akira's creation activity in the time with an antiwar peace movement and looked for TSURU Akira's thought through his works.

⑥英文キーワード

TSURU Akira, senryu, Peace Preservation Law, the Sino-Japanese war, proletarian literature movement, rebel army activity, Osaka eiju jail, famine, Korean laborer

鶴彬通信「はばたき」編集後記（寺内徹乗）

この勝村先生の論文は、昨年12月２～３日、尹奉吉没後85年の日韓共同学会「尹奉吉義挙と世界平和運動」【韓国独立紀念館・金沢準備委員会(尹奉吉義士共の会・月進会日本支部)・立命館大学コリア研究センター・一橋大学韓国学研究センター共催】で発表された原稿をもとに、勝村先生が若干加筆修正されたものです。もともと原稿は横書きでしたが、「はばたき」の書式に合わせ縦書きにし、本文の年号を漢数字に修正し、先生のお写真やプロフィールも付け加えさせて頂きました。勝村先生によれば「川柳についても鶴彬についても専門家ではない私が、無謀にも発表を引き受け、３カ月ほどでまとめたもの」ということですが、鶴彬を学んできた人たちが読んでも、「なるほど」と思えることが多々あり、しかも鶴彬を知らなかった人が読んでも分かりやすくまとめられています。この論文は韓国語（ハングル）に翻訳され、これで鶴彬の偉業を知ったという韓国人も多く、鶴彬は韓国側からも高く評価されることが証明されました。その意味においても、この論文は大変意義がありました。

勝村先生と学会の皆さまに感謝申しあげます。

尹奉吉の学会で使った資料（全293ページ）。勝村先生の論文と韓国語訳は、これに掲載されました。

明治百五十年
韓国併合の歴史から振り返る

鶴彬を顕彰する会幹事　寺内　徹乗

4月27日に行われた歴史的な南北首脳会談は世界の視線が注がれ、平和協定と非核化の兆しが見えた。今後の展開は誰にも予想できないが、世界は米朝首脳会談の行方を、固唾を飲んで見守っている。

そもそも朝鮮半島の南北分断は、35年間朝鮮半島を支配した日本の敗戦に始まる。やがて南北で二百万人以上の死者を出す大戦争となり、今なお休戦状態にある。20世紀から始まる朝鮮の不幸の歴史には、日本にも大きな責任がある。

日本は、なぜ朝鮮半島を支配したのか。「韓国併合」は何だったのか。この重要なことが、受験偏重の日本の義務教育では詳しく教えられない。

その反面で、世の中は歴史を捏造した本やサイトで溢れ、その多くは、戦後の歴史教育を「自虐史観」だとしたものだ。韓国併合については、大韓帝国が日本の統治下に入ることを選択したのであり、日韓併合(韓国併合)は侵略ではなく、日本は朝鮮半島のインフラを整え、教育も受けさせ、「良いこと」をしたという。美しい日本には悪い歴史など存在しないと言いたいのだろう。

少しずつ始まった朝鮮への侵略

日本は朝鮮半島を武力で征服すべきだという発想は幕末の思想家・吉田松陰にみられるが、国策としては一八七三年(明治6年)の征韓論が最初である。これは、欧米視察から帰国した岩倉具視、木戸孝允、大久保利通らにより退けられたが、日本は欧米列強に追いつくために富国強兵の国づくりを急いだ。

一八九四年(明治27年)日本は、朝鮮の主導権をめぐり日清戦争を始め、翌年、勝利した。その頃、ロシアも朝鮮半島に手を伸ばし、朝鮮内部でも親露派が抬頭するようになっていた。そのため朝鮮に駐在していた日本の軍人・外交官らは、親露派の朝鮮王妃・閔妃(びんひ)を暗殺した。

一八九六年、清との下関条約において清の台湾を日本の領土にし、清にあった朝鮮王朝の宗主権を放棄させた。日本はこのとき清の遼東半島も割譲させたが、フランス、ドイツ、ロシアの三国干渉により、清に返還した。国民は政府の弱腰外交を批判し、政府は「臥薪嘗胆」をスローガンに、ロシアへの敵対心を燃やしはじめた。

一八九七年、日本は朝鮮王朝が独立国であることを知らしめるために、国号を「大韓帝国」と改めさせた。それでもロシアは、朝鮮半島への介入をやめない。

一九〇二年、日本はイギリスと日英同盟を結び、アジア侵出の後ろ盾を得た。

一九〇四年(明治37年)、日本は韓国の独立を守るためという名目で、日露戦争を始めた。その間、日本は韓国と「日韓条約」を締結し、大韓帝国の外交や軍事といった国の主権を奪った。それと同時に、朝鮮人による義兵闘争が始まるが、日本はこれを軍事的に鎮圧しようとした。

一九〇五年、日露戦争に勝利した日本は、ロシアとポーツマス条約を結び、満州鉄道や清の租借権などを獲得し、大韓帝国を指導、保護、監督する権利も獲得した。

当初、伊藤博文(初代韓国統監)は、大韓帝国を日本の保護国としたまま独立させる方針をとっていた。しかし義兵闘争は治まらず、経済成果も表れなかったため、一九〇九年(明治42年)、「韓国併合」を閣議決定した。その中で、伊藤博文は朝鮮人の安重根(アン・ジュンクン)に暗殺された。(この年、鶴彬は生まれている。)

一九一〇年(明治43年)、韓国政府に「韓国併合ニ関スル条約」の締結を強要し、韓国の皇帝・宗純を退位させた。ここまでが韓国併合までの概略である。

その後、日本人はインフラを整備したが、これはあくまで日本人のためであった。教育は日本語を公用語とする皇民化政策が推し進められ、一九三七年、「皇国臣民ノ誠志」が定められ、神社参拝や宮城遥拝が強要された。一九三八年には朝鮮語の授業は事実上廃止された。

ところで、韓国併合によく似た「日韓併合」という言葉もある。これは日本の侵略の歴史を認めたくない人たち(朝鮮人を差別する人たち)により、いつのころからか使われ始めた。

もしこれが日韓対等の平和的統合であったならば、朝鮮人による暴動や日本の要人暗殺事件は起こるはずはない。実際、一九一九年には反日独立運動(三・一運動)が起こり、一九二三年、朴烈(パク・ヨル)が大正天皇の暗殺を計画、一九三二年、李奉昌(イ・ボンチャン)が昭和天皇の暗殺未遂、上海では、一九三二年、尹奉吉(ユン・ボンギル)は軍の要人を爆殺する事件を起こした。

侵略政策を批判した啄木、鶴彬、湛山

「韓国併合」のニュースを知って、石川啄

木は、次のような歌を日記に詠んでいる。

地図の上朝鮮国に黒々と墨を塗りつつ秋風を聞く

啄木は、日本が戦争に突入し、冬の時代を迎えることを予言した。だが、こうした考えだった日本人は、少数派であった。世論は、韓国併合を日清・日露戦争に続く快挙とみなした。それが後の満州事変、日中戦争、太平洋戦争と連続的に拡大していった。

当時の国民は、これらの戦争は欧米列強から日本を守るための「自衛の戦い」だと信じていた。その結果、国防線は朝鮮、旧満州、アジア太平洋へと拡大し、現地の人々を戦争に巻き込み、略奪、虐殺の限りを尽くした。

今でも一部の国民は「自衛の戦いだった」と信じている。安倍首相もその一人だろう。安倍首相は「侵略の定義は定まっていない」と国会で答弁した（二〇一三年）。だが、侵略とは他国の主権・領域を武力で侵すことを言うのだ。日本のしたことが「侵略ではない」というのは詭弁である。

また安倍首相は、日本の侵略と植民地支配を認め謝罪した村山談話と従軍慰安婦を認め謝罪した河野談話を見直すと公言し、実際に戦後70年、安倍談話（二〇一五年）が発表された。

この中では有識者の助言で「反省」と「お詫び」という言葉は盛り込まれたが、「侵略」「植民地支配」については、その主語がない。また安倍談話には「日露戦争は、植民地支配のもとにあったアジアやアフリカの人々を勇気づけました」と、日本の侵略戦争を正当化する表現がある。しかも子孫に「謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません」と述べるに至っては、安倍首相が心から反省・謝罪しているとは思えない。

戦争を反省のなさは、防衛政策にも表れた。二〇一四年、集団的自衛権を閣議決定し、翌年、安保関連法を強行採決させた。すなわち、軍事基地網を世界中に張り巡らせ、実際に武力行使をしている米国（米軍）を守るために、自衛隊は海外で武力行使できるようになった。もし自衛隊が武力行使したならば、米国の敵対勢力から見れば、日本を侵略者と見なすだろう。安倍政権には他者がどう見るかという視点が欠けている。

銃剣で奪った美田の移民村

鶴彬が一九三五年に朝鮮や満州への移民政策を詠んだ句である。鶴彬は日本のやっていることが、侵略だと気が付いていた。

日本の侵略政策を批判したのは歌壇や柳壇だけではない。ジャーナリストとして批判した人もいた。その一人が石橋湛山（戦後の蔵相・首相）である。一九二〇年代には小日本主義を唱え「国防線は日本海にて十分」と植民地全面放棄を主張した。湛山はまた「いかなる民族といえども、他民族の属国たるを愉快とするごとき事実は古来ほとんどない」と、日本に支配されたアジアの人々の視点でものを見ることができ、彼らの心情にも共感していた。

だが当時の世論は、啄木、彬、湛山とは正反対であった。多くは、日本の拡大政策に賛同した。天皇の臣民たる日本人は他の民族より優れていると錯覚し、日本はアジアの覇者となって当然だと思うようになっていた。これは「八紘一宇」のプロパガンダにも表れている。

もし当時の日本人が等身大の日本人であることを自覚し、アジアの人たちの心情を理解出来たならば、日清戦争から始まる一連の戦争は起こらなかっただろうと私は思う。近年、「日本はすごい」といった趣旨の本が売れているのは、不気味な現象である。

国策としての植民地化

先に述べたように日本は朝鮮半島を侵略し植民地化したが、これは出渕春子さん（番組当時一〇〇歳）を追った石川テレビのドキュメンタリー「出渕家の百年―国策と向き合って」（二〇一六年六月二十日放送）で詳しく紹介されている。

出渕春子さんは、石川県小松市佐美町に五人兄弟の末っ子として生まれた。一九三三年（昭和８年）、春子さんは17歳のとき、同郷の出渕直一さんと結婚した。当時、出渕家は朝鮮で農場を経営していた。

遡ること15年前の一九一七年（大正六年）、春子さんの姑にあたる出渕小三郎さんは、家族を連れて、現在の韓国南部の南平に渡った。

南平は穀倉地帯で、日本人一五〇世帯が集落を作り、農業を中心に暮らしていた。当時の新聞は、朝鮮半島への農業移民政策を「平和なる殖民政策」として評価し、盛んに宣伝していた。これには日本の事情があった。

鶴園裕さん（金沢大学元教授）は説明する。

「構造的に農村が過剰な人口になると、普通、農民は都市に流れ、都市の雑用層になって、やがて工場労働者などになる。だが、日本の場合は、産業革命が十分に成熟しなかっ

たため、あふれてきた農民を工場で吸収することはできなかった。だから、海外に出していこうという国策となった」

朝鮮移住案内（1917年）

農業移民を募集するために「朝鮮移民案内」という手引書も作られた。そこには、朝鮮に行けば今より七倍の農地が与えられ、将来、地主として農業ができるということが書かれてある。その誘い文句に載って、日本各地から多くの貧しい農民が移民政策に従い、朝鮮に渡った。朝鮮には最も多い時で75万人の日本人が暮らしていた。しかし、農業移民がどのような生活を送っていたかは、今もほとんど知られていない。

朝鮮での出渕家を知る安達義元さん（長崎県佐世保在住・当時92歳）は語る。

「南平は土地が肥え、大根や白菜、梨やブドウなどの果物を作っていた。ほとんどの日本人が、（朝鮮人の）女中を雇い裕福な暮らしをしていた」

大地主となった日本人移民

春子さんが朝鮮半島に移住した出渕家に嫁いだとき、出渕家は50ヘクタールの農地を持ち、たくさんの朝鮮人の小作人を抱える大地主だった。出渕春子さんは予想外にも裕福な暮らしを味わった。春子さんは語る。

「朝鮮のお母さんが草むしり、朝鮮のお父さんが鍬やら土運んだりしていた。労賃は1日で男25銭。女はそれ以上に安かった。安いから向こうの人（＝朝鮮人）ばっかり使うんや。それやから（日本人は）遊んでいられる。肥やしもいらわず（＝触らず）、ここ（＝小松市美佐町）で鍬持って作った人のお金と一緒や。向こう（＝朝鮮半島）で水田さえ買って持っていればよかったんや」

東洋拓殖株式会社京城（ソウル）本社

一九一〇年（明治43年）の韓国併合から2年前、時の総理大臣の桂太郎が、朝鮮の経済的な支配と日本国内の食糧難の解決を狙い、国策会社「東洋拓殖株式会社」、通称「東拓」を設立させた。

東拓は、朝鮮半島の土地を次々と買い取り、日本から渡ってきた農民を住まわせた。そして、そこで収穫した米を日本へ輸出し、深刻になっていた日本の食糧不足を解消させようとした。

朝鮮の人からどのような方法で土地を買い取ったのか。

加端忠和さん（石川県加賀市・郷土史家）はそれを示す資料を見つけた。それは、農業移民が30年間に増やした自分の土地の権利書だった。

日本人が買い集めたのは、朝鮮の人たちが何代にもわたって耕してきた農地であった。もともとそこにいた農民は、ふるさとを追い出された。取引価格は、当時の適正価格の7分の1という不当なものだった。

加端さんは、日本人に不当に土地を奪われた朝鮮人（在日一世の男性）から話を聞いた。朝鮮人は語る（テープ音声）。

「裁判しても、警察署長に話を聞く。警察署長は日本人やろ。言うことを聞かないと捕まえていく。裁判しても、裁判官も検察もみんな日本人やろ。ほんなもん強制的や。全部取られてしまった」

農業移民の裕福さは、こうした朝鮮人からの土地収奪の上に成り立っていた。

敗戦で気づいた侵略政策

ところが、一九四五年（昭和20年）終戦となり、35年にも及ぶ朝鮮植民地支配が終わった。このとき、春子さん一家の立場は一変した。春子さんは語る。

「（日本が）敗けたら、激しい泥棒がおった。厳しい小作料を取った人を殺しに来た。まけて（＝安くして）くれって言われたら、まけてやらんなん。まけてやらんと取った厳しい家もあったからや」

戦後、朝鮮に移住していた日本人は、土地や財産をすべて放棄して日本へ引き上げた。春子さんはそこで初めて、農業移民政策が侵略につながっていたことに気がついた。移民たちの土地はすべて国の賠償に使われ、春子さんの一家も、すべてを失った。

引き上げのとき、春子さんは3歳の長女カ

ズエさんを抱えていた。ふるさと佐美町に戻った出渕家は、近所の人から土地を借りて、貧しさから再出発をした。春子さんは語る。

「一升の米もないしお金もないし裸やったけど、おじじ（義父）の友達の家に行って田んぼ作らせてもらった。そのとき七俵とれた。忘れんよ。あれが一番うれしかった」

終戦から二年後、困窮の中で息子敏夫さんが生まれた。現在、この土地で専業農家を営む敏夫さんは、「国の政策に振り回されずただ平穏に暮らしたい」という思いから、航空自衛隊小松基地の騒音への反対運動をしている。

以上が、ドキュメンタリー番組「出渕家の百年」のハイライトである。この特番は、第25回ＦＮＳドキュメンタリー大賞を受賞した。

日本に渡った朝鮮人移民たち

行くどころない冬をおつぱらはれる鮮人小屋の群れ

これは鶴彬の川柳だ。日本人は朝鮮人に家を貸さなかったため、朝鮮人は河川敷などにバラックを立てて生活し、「朝鮮人部落」と呼ばれた集落が形成されていった。

朝鮮に渡っていい生活をしていた日本人が約75万人いた一方で、土地を追われ日本に渡り、悲惨な生活をしていた朝鮮人（一説には約二百十万）がいたことも忘れてはなるまい。

半定歩だけ働けばなまけるなとどやされるこの鶴彬の川柳にあるように、当時朝鮮人は日本人よりも安い賃金（半定歩＝半分の賃金）でこき使われてきた。だから小屋のような家で生活せざるを得なかった。

戦時下では、朝鮮人は兵隊にとられた日本人の労働力の穴埋めとして徴用された。

ヨボと辱められて怒りこみ上げる朝鮮語となる

この鶴彬の川柳にあるように、朝鮮人は日本人により理不尽な差別も受けてきた。

一九二三年の関東大震災のときには、「朝鮮人が井戸に毒薬を入れる」「朝鮮人は略奪強姦をする」などのデマが流れ、自警団が多数（一説に二六〇〇人以上）の朝鮮人や中国人を虐殺した。

一九四〇年の日本政府による創始改名によって、八割の朝鮮人は名前を日本人風に改めた。家族を日本人の差別や暴力から守り、生き抜いていくための苦汁の選択であっただろう。

東京麻布の朝鮮人集落（1930年代）
在日韓人歴史資料館ＨＰより

現在でも一部の日本人による在日朝鮮人への差別は根深く残り、近年、都会ではヘイトスピーチのデモが深刻な社会問題となっている。ドイツではナチスを生んだ歴史の反省から、特定の民族差別を煽るデモは法律で厳しく罰せられる。日本でも一昨年、ヘイトスピーチ対策法が出来たが、罰則規定のない骨抜きの内容となった。

平成３０年（２０１８年）は、明治元年（１８６８年）から起算して満１５０年の年に当たります。

明治１５０年をきっかけとして、明治以降の歩みを次世代に遺すことや、明治の精神に学び、日本の強みを再認識することは、大変重要なことです。（以下省略）

これは首相官邸のホームページの一文である。侵略の歴史を反省したくない安倍首相とその取り巻きたちは、明治から終戦までの日本を誇らしく思っている。そしてオールジャパンで日本を賛美することで、改憲へと世論を誘導したいという意図も見え隠れする。

明治から終戦までの歴史は、ごく一部の上流階級の人々にとっては華やかな歴史であったかもしれない。だが、ほとんどの日本人にとっては抑圧の歴史であり、加えてアジアや太平洋諸島の人々にとっては侵略と屈辱の歴史であった。

日本の負の歴史から目を背け、明治の精神に学び、日本の強みを再認識するならば、日本は再び「いつか来た道」を歩むだろう。

「歴史を変えたり無かったりすることはできない。過去に目を閉ざす者は現在に対しても盲目になる。非人間的な行為を心に刻もうとしないものは、また同じ危険に陥るのだ」

ドイツの元大統領・ヴァイゼッガー（一九二〇年―二〇一五年）の言葉で締めくくりたい。（完）

オウム元信者
井上死刑囚からの手紙

【はじめに】

今年、平野喜之さん（かほく市高松の浄専寺住職・鶴彬を顕彰する会幹事）に、オウム真理教元信者の井上嘉浩死刑囚（48）から数通の手紙が届きました。

平野さんは、京都の洛南高校で井上死刑囚（以下「井上氏」と記す）の６つ上の先輩にあたります。平野さんは井上氏とは面識がありませんでしたが、二人には共通の恩師がいました。

二〇〇四年、井上氏が高裁判決で死刑が言い渡された後、井上氏の両親は息子の洛南高校時代の恩師に相談しました。恩師は、授業で宗教を教えていた生徒がオウムに入信し事件に関与してしまったことに責任を感じ、井上氏を平野さんに紹介しました。

平野さんは二〇〇六年からこれまで30回以上、井上氏と面談を重ねてきました。二〇〇七年には『生きて罪を償う』井上嘉浩さんを死刑から守る会」の設立に携わり、事務局長として井上氏に代わって情報を発信し続けています。

今年３月14日、東京拘置所に収容されていた13人のオウム死刑囚のうち井上氏を含む７人の死刑囚が死刑執行施設のある全国の拘置所に移送されました。いよいよ死刑が近いのではないかと報じられました。それに関連し、平野さんは連日テレビや新聞各紙の取材を受け、報道されました。

平野さんは、井上氏の死刑が確定する前の二〇〇九年頃から、井上氏の心に変化を感じました。平野さんは取材でこう語りました。

「井上死刑囚が自らの行いの結果として教団を支え、事件につながったと受け止めるようになりました。」

また、平野さんはこうも語りました。

「井上死刑囚にとっては、遺族の声を聞き続けることが必要です。私たちにとっては、『オウムとは何だったのか』を知るために、当事者の言葉に耳を傾けることが重要です」

【井上嘉浩氏の手紙本文】

平野さんへ

一連のオウム裁判が終結した今、改めまして、自分達が事件を起こしていなければお亡くなりになられた被害者の方々やご遺族の方々、今も後遺症に苦しんでおられる被害者の方々はどのような人生を過ごしておられたであろうかと思い巡らさずにはいられません。ただただ申し訳なく、申し訳ない限りです。

何故、救済の名のもとにこのような事件を起こしてしまったのか、考え続けています。

当時を振り返りますと、麻原が掲げたハルマゲドン（終末思想にもとづく世界の最終戦争）から神々の意思により人類を救済するとの大義を妄信することで、唯一神々の意思を知るとされた麻原に善悪の判断を委ねることになりました。それにより、自己の言動に対する社会人としての当然の責任感を18歳で教団に出家して以来、「自分で考えてはいけない」と教え込まれたことにより放棄してしまっていました。これが教団の恐ろしさの一つです。信者に自分で考えさせないことにより、社会規範についての思考を停止させ、人間の善悪の根本となる個としての責任の自覚を破壊していくのです。

それを具体的に実現させたのが教団の修行でした。麻原は仏教やヨーガの心を変容させていく技術や薬物まで悪用して、徹底的に信者の社会規範や善悪の根本となる個としての人格を破壊していき、代わりに麻原の手足として動く人格を刷り込んでいきました。これが麻原が構築したマインドコントロールです。

信者はまじめに修行すればするほど、自分を見失い、人間性を喪失し、能面のような顔つきになっていきます。

こうして麻原は救済の名のもと信者を手足として利用していましたが、信者に指示したことによる結果について社会人として全く責任感を持ち合せていませんでした。

教団の中では誰も自分達の言動に対する社会人としての責任を自覚することなく、神々の名のもとにおいて自分達がすることは社会の善悪の倫理を超えた神に通じる絶対的な正義であると思い上がり、無責任な振る舞いがエスカレートしていき、大罪を犯すようになっていった面がありました。

このような個としての責任の自覚の欠如は、オウム裁判にも投影されてしまったのではないかと内省しています。

麻原はもとより事件の責任について全く語ろうともせず、沈黙に逃げ込みました。

私をはじめかつての信者は、事件についての謝罪と事実関係について語ることはできても、裁判上の様々な制限もありましたが内省

が足りず個としての責任について語ることばをほとんど持ち合わせていなかったのではないかと反省しています。

振り返りますと麻原は「個を滅却して全体のために行動する全体主義」を教団活動にアレンジしたとも言えます。その意味におきましてオウム事件は、「私」を否定「公」のために尽くすことを美徳とする日本人特有の民族性にも根ざしたものであったのかもしれません。

私の中にこのような全体主義に同調してしまう素地があったからこそ、麻原にも同調してしまったのであり、個としての責任の自覚を欠如してしまったのは私自身に問題がありました。

このような全体主義にもとづいて形成された教団では、信者の一人一人の活動と教団の活動とは切り離すことはできません。全ての事件の責任は、直接関与しているとかいないとかに関わらず、当然に私にも一人一人の信者にもあります。

当時、信者が救済と信じ活動してきたことの全てが、麻原の祭政一致の専制国家体制を樹立するための国家転覆の野望を増長させていき、全ての事件につながっていきました。

突き詰めますと、麻原を信じたことそのものが罪のはじまりであり、全ての罪の責任は私にあります。

今、死刑囚として罪と死に向き合っています。

罪と向き合うほど、被害者の方々のたとえようのない悲しみ、苦しみ、痛みを本当に分かるというわけにはいきませんが、ひしひしと感じます。

罪の悲しみと痛みが人から人へと、過去から未来へと、どこまでも波及していくのを痛感せずにはいられません。死と向き合うほど、どれほど生きていることそのものがかけがえのないものなのか、しみじみと感じます。それによりどれほど他者の命を奪うことが恐ろしく罪深いものであるのか、まざまざと迫ってきます。

何をもってしても償いようがなく、今だに償いようがない罪を償うにはどうすればよいのか、答えは見つかりません。

どうすることもできない絶望感にさいなまれ、もう耐え切れない、気が狂いそうだと何度も思いました。このような私を支えて下さる方々の温情がかたじけなくせつなくもあり、一人では生きていけない自分の弱さや無力さをしんみりと感じます。

罪をめぐるいのちの痛みと悲しみをじっと静かにかみしめていると、どこからともなくいのちの眼差しを感じます。そのようないのちは、私のものでも、誰のものでもなく、人間が作り出すどのような罪や過ちも悲しみや苦しみももれなく受け止める底知れぬ愛に満ちながら、同時にどこまでもじっと黙って見つめ、突き放し、一人一人が人として成熟していくようにうながしていく厳しさがあると感じます。ただただ静かに涙がこぼれます。

このようないのちの眼差しは、決して特別なものではなく、人が人として人とを愛したり、大切にしたりする時、誰に教わることもなく、自然に感じていることなんだと、今さらながらに思います。

それなのに多くの宗教はこのようないのちの眼差しに神や仏のレッテルを張って特別あつかいすることで壁を作り、人々の暮しから遠ざけてしまっているように思われます。

このような間隙を縫うかのように、麻原は自己の覚醒と人類の救済を掲げることで多くの若者が集まりました。

ところがそこで行われたことは、いのちの摂理とはまるで逆に、神々の名において命を救われるものと救われないものとに差別し、救済の名において悲惨極まりない事件を引き起こしました。誠に慚愧（ざんき）に堪えません。

今、せめて一人の人間として、命ある限り被害者の方々のお気持ちをかみしめ、オウム事件の全ての責任を自覚し、二度とこのような事件が起きないように、ほんの少しでもできることに努めていきます。

２０１８．２．21　井上嘉浩

（段落とルビを入れた以外は原文のまま）

【井上嘉浩氏の略歴】

一九六九年生まれ。京都府出身。高校２年の時に教団の前身団体に入会。教団では諜報省大臣として活動。一九九五年の地下鉄サリン事件など10事件に関与。二〇〇〇年の一審判決では地下鉄サリン事件で「後方支援」とされ、無期懲役を言い渡されたが、〇四年の二審判決では「総合調整役」と認定され、死刑が言い渡された。最高裁で上告が棄却され、二〇一〇年一月に死刑が確定した。

高校時代の井上氏

【あとがき】

鶴彬通信「はばたき」にオウム元信者の死刑囚の手紙が載っていることに驚かれた方もいるかと思います。これを掲載した理由は、

井上氏の手紙が、「命とは何か」「平和とは何か」を私たちに問いかけるものだったからです。

オウム事件は、特殊な宗教団体による特殊な事件として切り捨て、風化されるべきものではありません。井上氏も決して特殊な人物ではなく、誰もがこのような事件に巻き込まれる可能性があります。二度とこのような事件を起こさせないためにも、オウム事件は永遠に語り継がれるべきものだと思います。

井上氏は手紙の中で、自分がマインドコントロールされていく過程を洞察しています。

「・・・18歳で教団に出家して以来、『自分で考えてはいけない』と教え込まれたことにより放棄してしまっていました。」

「信者に自分で考えさせないことにより、社会規範についての思考を停止させ、人間の善悪の根本となる個としての責任の自覚を破壊していくのです。」

「代わりに麻原の手足として動く人格を刷り込んでいきました。」

「突き詰めますと、麻原を信じたことそのものが罪のはじまりであり、全ての罪の責任は私にあります。」

井上氏は加害者になってしまった反省から、「自分で考えること」「個としての責任を自覚すること」の大切さを訴えます。さらに井上氏は、個と社会の関係をさらに掘り下げ分析します。

「振り返りますと麻原は『個を滅却して全体のために行動する全体主義』を教団活動にアレンジしたとも言えます。その意味におきましてオウム事件は、『私』を否定『公』のために尽くすことを美徳とする日本人特有の民族性にも根ざしたものであったのかもしれません。」「私の中にこのような全体主義に同調してしまう素地があったからこそ、麻原にも同調してしまったのであり、個としての責任の自覚を欠如してしまったのは私自身に問題がありました。」

井上氏が指摘したように、オウムの中で起こっていたことは、日本で起こっていることの縮尺版ともいえます。自由、人権、民主主義を重視する現代の日本にあっては、それは見えにくいですが、戦前の日本では顕著に表れました。

井上氏が指摘するように、日本では「全体主義」のもとでは、「公」のために「私」が犠牲になることが美徳とされます。戦前の日本人が、神風特攻隊の戦死を讃えたのは、その象徴です。

国家(教団)を全体主義にするためには、権力者は正しい情報をシャットアウトし、権力者にとって都合のよい嘘の情報を流します。それを繰り返し繰り返し続ければ、国民(信者)はマインドコントロールされます。

そういう状況でも、マインドコントロールされない人もいます。自分の頭で考え、限られた情報の中で真実を見つける人です。鶴彬のように勇気をもってそれを発信した人もいましたが、社会秩序を乱す「アカ」や「非国民」というレッテルを貼られ、粛清されていきました。

当時のオウム教団内でも麻原に疑問を持つ者には過酷な修行が強要されました。一九八九年、修行を批判した男性信者は、麻原の命で側近信者らに殺されました。死体は証拠隠滅のために焼却され、骨は砕かれ、まかれました。

ものが言えない社会では、マインドコントロールされない人も、保身のために沈黙、同調します。そうなった集団は、破滅するまで突き進みます。オウムと戦前の日本に共通したことです。

井上氏は、麻原彰晃こと松本智津夫死刑囚の無責任さも指摘しました。オウム裁判で麻原は、一連の事件をすべて弟子たちのせいにしました。かつて麻原の愛弟子だった井上氏が法廷で真実を証言したとき、麻原は発言中止を頑なに要求しました。麻原は以後の裁判で奇行を繰り返すようになり、最後は沈黙に逃げこみました。

リーダーの無責任ぶりは東京裁判にも表れました。A級戦犯として死刑判決となった東條英機元首相は「敗戦責任」は認めましたが、戦争を始めた責任は認めませんでした。同じく死刑判決となった広田弘毅元首相は「雷に当たったようなものだ」と、他人事のように判決文を聞きました。近衛文麿元首相は、A級戦犯容疑者リストに自分の名があると知るや否や自殺しました。

現在も、政治の無責任体制は続いています。

最後。鶴彬にゆかりのある井上剣花坊と信子の娘、大石鶴子さんは、晩年、オウム事件を川柳に詠んでいます。

サリン風吹けば落下の死となりぬ
人を皆人でなくした教義あり
信仰がとけて真実口を出る

(寺内徹乗・記す)

鶴彬句碑・資料館 見学者 相次ぐ

この冬、北陸地方では大雪となりましたが、雪も溶けて温かくなり、今年も県内外から見学者が相次いでいます。

３月19日には真宗大谷派金沢教区主催のフィールドワークがあり、約30名が高松の鶴彬句碑・鶴彬資料室を訪れ、浄専寺では平野喜之住職（鶴彬を顕彰する会・幹事）が鶴彬と同時代を生き、若くして亡くなった金子みすゞ（詩人）と新見南吉（作家）の話を交えながら説明しました。

金子みすゞ（一九〇三―一九三〇）　享年26歳

大漁
朝焼け小焼けだ大漁だ
オオバいわしの大漁だ
浜は祭りのようだけど
海の中では何万の
いわしの弔いするだろう

すずめのかあさん
子どもが　子すずめ　つかまえた。
その子の　かあさん　わらってた。
すずめの　かあさん　それみてた。
お屋根で　鳴かずに　それ見てた。

鶴　彬（一九〇九―一九三八）　享年29歳

八歳で父が亡くなり、母が再婚し東京へ行く。
可憐なる母は私を生みました
皺に宿る淋しい影よ母よ
肺を病む女工故郷へ死にに来る
修身にない孝行で淫売婦
母国掠め盗った国の歴史を復習する大声
ヨボと辱められ怒りこみ上げる朝鮮語となる
こんなでつかいダイヤ掘つて貧しいアフリカの仲間達

新美南吉（一九一三―一九四三）　享年29歳

４歳のとき母が病没。８歳のとき母の実家に一時預けられた。南吉は、童謡や詩、短歌や童話の中で、終生母親へのあこがれを追い求めた。代表作は童話『ごん狐』『狐』『小さい太郎の悲しみ』『百姓の足、坊さんの足』『手袋を買いに』。一九四二年、戦時色の高まる中で児童文学は「冬の時代」を迎えたが、南吉は特異な存在だった。

平野喜之住職は「金子みすゞ、鶴彬、新美南吉の３人には、弱く小さなもの、大きなものの犠牲になって押しつぶされそうになっているものたちに眼差しを注ぐという共通点があります。鶴彬と新見南吉には、母への思慕が濃いという共通点があります。３人とも、世間的な意味では決して幸福ではなく、激動の時代を生き、それゆえにとも言うべきか、人間の冷たさや暖かさ、醜さや美しさ、人生の喜びや悲しみをしっかり見つめ、短い生涯の中でそれらを作品に表して、私たちに残してくれました。それはおおきな財産です」と語りました。

その後、質疑応答もありました。３人のなかで国策を批判したのは鶴彬だけですが、その鶴彬の強さはどこから来るのか。鶴彬のバックボーンは何だったのか。鶴彬は、言わずにはいられない人間への「愛の力」が恐怖心を上回ったのではないか。などなど話は尽きませんでした。

その後、元北陸大学教授の田村光彰さんによる内灘闘争の解説で、内灘町歴史民俗資料館「風と砂の館」と内灘闘争遺跡（米軍内灘試射場着弾地観測所跡）のフィールドワークを行いました。

千葉県の九条連（鶴彬生家前で撮影）

４月18日には千葉県の九条連の14名が、金沢観光も兼ねて、一泊二日の日程で高松を訪れました。

快晴で、鶴彬の生家（喜多家）前の八重桜は満開でした。

一行は、生家、浄専寺、鶴彬資料室を訪れ、高松の旧街道（中町通り）には、昔の街並みが残っていることにも驚き、「街並みを保存する条例があるのでしょうか？」という質問もありました。条例はありません。腐りにくい高級建材が使われているわけでもありません。過疎と核家族化が偶然、この美しい景観を残しました。

見学者からは、多くの感想が聞かれました。

「３年前、澤地久枝著『昭和・遠い日　近いひと』を読んで鶴彬を知りました。それ以来、ずっと高松の生家を訪れたいと思っていました。今日は、感激しています」

「このように地元で鶴彬を守って発信している人がいて感銘を受けました。これからも川柳と鶴彬の学びを深めたいです」

「鶴彬の生き方は、神山征二郎監督の映画『鶴彬―こころの軌跡』を観て知りました。鶴彬は正直な人です。あの時代にあのような川柳を発表すれば、殺されることは分かっていたはず。どうして、自分の命を顧みなかったのでしょうか。私は、今の政治は変だと思いますし、『戦争反対』と言っていますが、足が重くなるときもあります。私には鶴彬のような生き方はできません」

九条連の一行は、歴史公園の句碑を巡り、かほく市内の旅館で一泊。翌日は金沢市内を観光し、千葉への帰路につきました。

国賠同盟名古屋市北支部（資料室）

5月13日、愛知県からは国賠同盟名古屋市北支部の22名が訪れました。小雨でしたが、歴史公園と生家の句碑を巡り資料室を見学しました。最後、浄専寺で平野道雄前住職から宗教、政治、鶴彬に関する話を聞き、3時に帰路につきました。

千葉県　9条連から
千羽鶴　贈呈

千葉県の金安雅晴さんからお手紙と9条連の皆さまが心を込めて折って下さった二つの千羽鶴が届きました。ありがとうございました。

さっそく資料室に飾らせて頂きました。

鶴彬を顕彰する会の皆さまへ

4月18日、鶴彬の生誕祭を訪れた際、皆さま方から展示物の説明や40分のドキュメンタリー番組を視聴させていただき訪ねて良かったと思いました。ありがとうございました。

当日あずかった千羽鶴を手渡しする予定でしたが、私が忘れるという大失態を犯してしましました。従って遅くなりましたが、お送りしますので資料室に展示する等して頂ければ幸いです。

私たちは「鶴彬の生き方は誰も真似ることはできない。鶴彬の願った世界を自分もまた願うことこそ重要なのだ」と浄専寺前住職の言葉を肝に銘じ、今後も憲法九条を守り、戦争への道を阻止するために9条連活動（憲法9条を世界へ未来へ）を強化拡大していく所存です。

千葉県　9条連
千葉地区　9条連
大原地区　9条連
安保地区　9条連

千羽鶴（鶴彬資料室で撮影）

柳田邦男さん
原発をテーマに講演

3月31日、ノンフィクション作家・柳田邦男さんの講演「検証　福島　―起きたこと・起きていること・そしてこれから―」が石川県立看護大学（かほく市）で行われ、約三〇〇名の参加がありました。主催は「柳田邦男さんと生きることを学ぶ会」（代表・平野喜之）。原発が立地する石川県志賀町の高橋美奈子さんが呼びかけ人となり、浄専寺では講演準備委員会を重ねてきました。

講演の中で柳田さんは「『想定外』を想定しなければ、事故は防げない」「行政や事業者は事故の原因を追究してきたが、住民の命を守る体制ができていたかの報告がない」「避難計画は自治体だけではなく、国家規模で考えなければいけない。解決できないなら、原発をやめるしかない」と話されました。柳田さんの講演後のパネルディスカッションでは、福島県浪江町から石川県に避難された特別養護老人ホームケアマネジャー・石井いずみさん、群馬から石川県に自主避難された助産師・村上圭子さん、志賀町の薬剤師・笠原友子さんが体験談や原発への思いなどを語り、柳田さんはそれにコメントしました。

講演後、柳田さんを囲んで講演スタッフの打ち上げを行い、そのとき鶴彬の話題も出ました。柳田さんは川柳に興味があり、ユーモア川柳をいくつか紹介。絵本にも造詣があり、妻は絵本作家の伊勢英子さん。柳田さんは鶴彬にも興味を示され「是非、鶴彬の絵本を読んでみたい」と話されましたので、謹呈いたしました。お返事を心待ちにしています。

（寺内徹乗・記す）

平成29年度（岩手県）こどものこころ五七五年間賞

宇部　功・選

冬が明けねむるつぼみが目を覚ます
寺田小六年　津志田富仁

アルバムは楽しい話わいてくる
同　五年　遠藤　聖奈

孫からの希望もらえるメッセージ
玉山小五年　松森　美月

こおりみちペンギンいっぱいいるみたい
城北小一年　よしだひなた

おそろしいインフルエンザにこおりつく
同　二年　こんくるみ

うんどう会ママもカメラとはしってる
同　二年　出口　穂佳

北国に強く生きぬく力つく
同　三年　佐藤　うた

ふぶきでも家族の声でえ顔咲く
同　三年　山下　美音

あらいもの母のつかれた音がする
同　四年　関　鈴音

鬼の母セミの唄よりうるさいな
同　五年　佐藤りえの

お帰りと墓から見えたおやじの目
同　六年　三浦　楽人

むだづかいびんぼう神がやってくる
涌津小五年　小野寺みか

雪つもりルンルンしてるスキー板
常盤小五年　岩淵　悠人

給料日ママがるんるんスキップだ
柳沢小四年　櫻井　宇美

夏野菜雨降り続き実らない
河北小五年　畠山　快生

食べる母横に横にと育ってく
角浜小五年　平中　陽菜

ミサイルの元気が人の明日を消す
土淵小四年　髙田　絵莉

ひまわりが花火のようにかがやいた
同　四年　田中　理夏

汗をかき作った野菜日本一
山根小六年　大西　茜

人間は地球どんどん食べている
花巻小四年　加賀　忍武

見るだけでせすじがこおる天気予報
同　四年　髙瀬　優月

スキップで帰るよ今日はたんじょう日
生出小四年　山崎　碧斗

努力してお札の顔になりたいな
水分小六年　野村ふく葉

今朝の牛バロメーターは鳴き声だ
吉ヶ沢小四年　芳田　悠華

大人たち子どもにかえる雪遊び
小屋瀬中一年　元村　心

国債に不満のつのる日本国
宮古高校三年　佐藤　光

お知らせ

今年も宇部功先生のご厚意と高松小学校の歓迎があり、４年目となる鶴彬の特別授業が、６月28日（10時30分～正午）に決定しました。

一般や先生を対象にした宇部先生の講演会（勉強会）なども計画しています。

現代を鋭く風刺した「和」の川柳

鶴彬の精神を今に受け継いでいる柳誌「和」（故・岡田一杜さんが一九五〇年に創刊）より、今年の和の句会から互選で点数が高かった秀句を紹介します。

「和」６６４号（１月句会）より

原発のごみ処理ずっと未然形　林
安倍信じ未決房に居る夫婦　立東爺
ゼネコンの太いパイプが地下を這う　大峰

「和」６６５号（２月句会）より

再稼働動かすための核神話　宏
国会で動かす口にウソあふれ　林
税金も裁量制にしてほしい　晃裕
非正規は備品ですからハイ返品　白眞弓

「和」６６６号（３月句会）より

失せたのは書類にあらず正義なり　伸子
一晩で適材適所が罪人に　英人
文書より内閣みんな書き替えよ　takuya
うそのうそ重ねて牙城崩れ出す　亀公子

「和」６６７号（４月句会）より

官僚がバカ殿助ける猿芝居　白眞弓
嘘八百積んだ助け船沈み出す　大峰
過労死の悲鳴届かぬ最上階　亀公子

「和」では会員・投句を広く募集しています。問い合わせは、金沢市金石東二丁目十五―三十（渡辺方）または、
メール　kananabe@popolo.org まで。

新会長　金田平夫先生に決まる

第19回　鶴彬を顕彰する会総会

平成30年、１月28日、まちかど交流館で鶴彬を顕彰する会の第19回総会があり、17名が参加しました。鶴彬を顕彰する会を10年間務めた長谷久人会長は、「これほど長く定例会に出席した会は、私の人生の中にはありませんでした。一身上の都合で会長を辞しますが、これからも会への協力を惜しみませんので、鶴彬の顕彰活動を広めて下さい」と退任のあいさつをしました。

新会長には、映画「鶴彬―こころの軌跡」のロケ時代からご支援を頂いてきた金田平夫さん（医師・金田クリニック院長＝かほく市）が顕彰会事務局より推薦されました。

金田新会長は「私には長谷前会長のような政治力はなく、医院の仕事も忙しいので、みなさんの期待には応えられないかもしれません」という断りの上で承諾して頂き、満場一致で決定しました。

なお役員改選では、長谷久人会長と北口吉治副会長が顧問に、板坂洋介幹事が副会長に、角島広治幹事が副会長に、遠田勝良幹事が事務局長に、新たに渡辺寛幹事を選出。竹田求さんが一身上の都合により幹事を退任されることになりました。

続いて小山広助事務局長より、平成29年度の事業報告および会計報告、納口清隆監査より会計監査報告がありました。

■鶴彬の絵本　出版

３月に絵本「鶴彬の生涯」（文・絵・寺内徹乗）が八〇〇部出版され、石川県内の小・中学校、公立図書館などに配布しました。

■宇部功先生・鶴彬の特別授業

前年度、前々年度に引き続き、盛岡市から元校長の宇部功さんを招き、６月29日、かほく市高松小学校で鶴彬の特別授業をしました。夜は浄専寺で講演「真脇遺跡と岩手～平和への道～」がありました。

■第６回歴史街道フェスタ（第５回市民川柳祭）

８月20日（日）。額神社は改修工事のため使用できず、高松産業文化センターを会場に、「川柳あんどん祭り」を行い、市民川柳の受賞作の発表と表彰式。アトラクションではＡＤＯＰＴの太鼓の演奏と、李彩霞さんの二胡のコンサートを行いました。参加者は例年より多く、約一五〇名の参加がありました。

■第22回鶴彬川柳大賞

９月３日（日）　第31回鶴彬忌大会（高松産業文化センター大ホール）で入選句発表。現代を鋭く風刺した新しい感覚の川柳または平成二十八年の漢字「金」を詠み込んだ川柳を募集し、全国から二百十九名（四百三十八句）の応募を頂きました。

■第19回　鶴彬をたたえる集い（碑前祭）

９月10日（日）　高松歴史公園

南町会館でドキュメンタリー映画「横浜事件を生きて」を鑑賞しました。９月14日（木）は、大阪城の鶴彬句碑建立10周年のイベントと重なったため、日程を調整し、小山広助事務局長、板坂洋介幹事、岩原茂明幹事、遠田勝良幹事、寺内徹乗幹事の５名が大阪のイベントに参加しました。

■シンポジウム「今、鶴彬から学ぶこと」

10月21日（土）２時～４時、石川県教育会館２階会議室。神山征二郎さん（東京）、佐藤岳俊さん（岩手）、岩佐ダン吉さん（大阪）をゲストとして招き、平野喜之幹事の４名のパネラー、司会は寺内徹乗幹事のもとで、パネルディスカッションを行いました。一三〇名の参加があり、好評を得ました。

■日韓の学会と交流

12月２～３日、尹奉吉没後85年の日韓共同学会「尹奉吉義挙と世界平和運動」の中で鶴彬が紹介され、パネルディスカッションには平野喜之幹事が参加。学会による高松でのフィールドワークもありました。

■鶴彬資料室の見学者多数

県内外から団体や個人として見学が多数ありました。

■鶴彬通信「はばたき」

５月、８月、10月、１月の４回発行。川柳講座の講演要旨、宇部功先生の授業記録と子どもたちの感想文、活動報告などを記録しました。また１月には、シンポジウムのみを記録した特別号を発行しました。

続いて遠田勝良事務局より、平成30年度の事業計画と予算が提案され、全員一致で決まりました。

□宇部先生・鶴彬の特別授業

今年も宇部先生のご厚意により、鶴彬の特別授業が行われることが決まりました。

※６月28日(木)の10時半～、高松小学校が決定しました。

□第７回歴史街道フェスタ(第６回市民川柳祭)

８月19日(日)。昨年に引き続き高松産業文化センターを会場に「川柳あんどん祭り」を行い、アトラクション及び、市民川柳の受賞作の発表と表彰式も行います。

※ＡＤＯＰＴ(アドプト)による太鼓と、伊田直樹さん伊田多喜さんによるチェロとバイオリンの演奏は決定しました。時間などの詳細は未定です。

□第23回鶴彬川柳大賞

９月２日(日)　第32回鶴彬忌大会(高松産業文化センター大ホール)で入選句を発表。

※現代を鋭く風刺した新しい感覚の川柳を募集し、例年のように「今年の漢字」は盛り込まないことになりました。

□第32回鶴彬忌大会

かほく市川柳協会(高松川柳協会・七塚川柳協会)主催の鶴彬忌の川柳大会(９月２日)を顕彰会としても支援していきます。

□第20回　鶴彬をたたえる集い(碑前祭)

鶴彬の命日、９月14日(金)　高松歴史公園。南町会館で、講演会(講師未定)も企画します。

◆第23回　鶴彬川柳大賞　川柳募集◆

対　象　全国公募。現代を風刺した新しい感覚の川柳。一人２句まで。未発表の作品に限る。

募集期間　６月１日(金)～８月１日(水)

投句料　一人につき千円(郵便定額為替)

応募先　石川県かほく市宇野気ニ81番地　かほく市教育委員会生涯学習課内　第22回「鶴彬川柳大賞」公募係　宛

鶴彬大賞１。優秀賞３。佳句５。入選句若干を４名の選者(福村今日志・伊東志乃・赤池加久・遠田亀公子)で互選します。

９月２日(日)　鶴彬忌大会で入選句発表。大賞には賞金１万円と副賞５千円相当のかほく市特産品。優秀賞には５千円相当の特産品。佳作には３千円相当の特産品。入選者にはそれぞれ記念品を贈呈。投句者全員に入選者の発表誌を送付します。

□演劇「鶴彬―時代を超えて」

(いしかわ県民文化振興事業)

９月21日(金)～25日(月)、劇団ジョキャニーニャにより、金沢市市民芸術村ドラマ工房で開催されることに決まりました。その公演に向けて、準備を行っていきます。

□鶴彬通信「はばたき」

５月、８月、11月、１月発送。

□鶴彬資料室の拡充

説明員の拡充や企画展示、物販など管理運営を改善していく。

□全国の鶴彬関連団体との交流

□ホームページ・ブログの充実

□パネルを活用し、各種イベントに参加

会員、機関誌購読者の拡大

□東京の鶴彬顕彰碑建立活動に協力

●小山事務局長より平成30年度の予算案、会則、役員の案件が提案され、満場一致で決まりました。（寺内徹乗・記す）

会員募集　(随時受付)

年会費　2,000円（団体3,000円）

「鶴彬通信 はばたき」

購読料　1,000円/年（４回発行）
郵便振替口座　00740－5－75480
加入者名　鶴彬を顕彰する会

■発　行　鶴彬を顕彰する会
■事務局　〒929-1215
石川県かほく市高松キ５
（小山　広助 気付）
■TEL・FAX　076－281－1201
■E-mail：turuakira@yahoo.co.jp
■ホームページ：http://tsuruakira.jp/